

ペテロ書簡 #23

信仰の目で見ると

ロバート・D・ルギンビル(博士)

<http://ichthys.com>

第一ペテロ 1 章 8-9 節(私訳):

[…イエス・キリストの栄光の再臨に際して] あなたがたは、これまで主を目で見たことがなくても主を愛しています。いま現在、主を見ることができなくても主を信じています。だからこそ、あなたがたは言い表しがたい喜び—来たるべき栄光の未来を先取りする喜び—にあふれているのです。やがてあなたがたは、信仰の目的であり目標でもある「いのちの救い」という最終の栄冠を、勝利のうちに受け取るのです。

序論: 前回の学びでは、この世に生きる信者に試練が避けられないこと、また私たちの信仰を試す数々の苦難を、ペテロが励ましをもってどう乗り越えるよう促しているか(6-7 節)を見ました。続く二つの節(上の訳文)で、ペテロは最も強力な二つの論点を最後に残していたことがわかります。彼の導入部における試練論の締めくくりであるこの二点は、どんなに人生に打ちのめされて落ち込んでいる信者であっても、悔恨や自己憐憫を洗い流すのに十分なはずで、すなわち 8-9 節の要点はこう要約できます。(1)「この悪魔の不公平で不親切な世でどんな経験をしようとも、あなたの人生は本当のところキリストのための人生です」。(2)「激しい試練の下で信仰を保つことは小事ではなく、あなたの救いそのものに関わる重大事です」。

「今という時」を最大限に生かす: 人生は慌ただしく、忙しいものです。責務と、時間とエネルギーに対する要求が、私たちの許容量を日々超えてふくらんでいるように感じられることさえあります。「奉仕に割く時間や力なんて、とても無理だ」と思えることもあるでしょう。それでも時折、自分に言い聞かせるべきです——「競技試合の時計」は刻々と進んでおり、神が私たち一人ひとりをこの地上に置かれた目的を果たすために与えられた時間は有限で、毎瞬減っているのだ、と。パウロの言うとおりに、「私たちが救われる時は、私たちが最初に信じた時よりも、いっそう近づいているのです」([ローマ 13 章 11 節](#))。最も貴重な資源である「時間」が刻々と減っていくという現実、すべての信者が真剣に心すべきことです。これは、自分の生涯の目的がはっきり見えていると思う人にも、個人として与えられた神の行軍命令を手探りで理解している最中の人にも、同じく当てはまります。むしろ時間が短いからこそ、私たちは妨げとなるものをかなぐり

捨て、自分に与えられた霊的賜物に基づいて、霊的成長と御用にいつそう励む必要があるのです。「過ぎ去った時」は、この世が差し出す空しさを味わうにはもう十分だったはずです([第一ペテロ 4 章 3-4 節](#))。今こそ、残された貴重なひとときを手中に収めるべきときです。なぜなら、自分自身の成長を続け、他者の成長のために仕えることこそ、この生涯で真に価値ある営みであり、永遠の報いが約束されている唯一の営みだからです。キリストに贖われた私たちは、キリストのために委ねられた時間を「贖い戻す(大切にする)」よう努めなければなりません([エペソ 5 章 16 節](#); [コロサイ 4 章 5 節](#) 参照)。有名な賛美歌の一節が言うとおりです——「ただ一度の人生、それもやがて過ぎ去る。キリストのためにしたことだけが、永く残る」。信者である私たちの人生は、すべてイエス・キリストのための人生です。「あなたがたは死んだ者であり、あなたがたのいのちはキリストと共に神のうちに隠されているのです。あなたがたのいのちであるキリストが現れるとき、あなたがたもキリストと共に栄光のうちに現れます」([コロサイ 3 章 3-4 節](#); 参照. [ガラテヤ 2 章 20 節](#) 参照)。

信仰の目でキリストを見る: キリスト教は「関係」です——神の御子、主イエス・キリストを個人的に信頼することに基づく、神との関係です。第一ペテロ一章 8-9 節でペテロは、犠牲を通して私たちを死から救い、永遠のいのちで祝福してくださった救い主への愛を確認します。私たちは主を愛します。心を尽くして愛します([マタイ 22 章 37 節](#); [ローマ 5 章 8 節](#); [第一ヨハネ 4 章 19 節](#))。たとえ主と顔と顔を合わせたことが一度もなくとも——だからこそ、私たちは熱心に、憧れの的である栄光の永遠の御国で主と結ばれる日を待ち望むのです。

天においては、神とキリストとの関係は完全なものになります。しかし地上では、霊的な関係であっても、築き、保つために努力と献身を要します。これは、これまで私たちが持ってきたどんな人間関係でも明らかなことです——浮き沈みがあるのは常です。ただし一つ、確実に言えることがあります。神との関係に生じる「つまずき」は、間違いなく私たちの側の責任だということです。というのも、この場合の相手は完全なお方であり、私たちのために完全な備えをしてくださっているからです。主との関係を良くするために必要なのは、主が「自分の分」を果たしてくださるかどうかに気を病むことではなく、むしろ自分の応答を改善することに心を向けることです。主の導きに従うことを学び、我流を無理に押し通そうとしないことです。そのためには「ビジョン」が要ります。見えないものを見るビジョン——信仰の目で見る力が。

しかし、どうすればそんなことができるのでしょうか。肉の目では神を見ることができません。ですから、私たちは神を、心の目——信仰の目で見ることを学ばなければなりません。これを学ぶなら、神が一人ひとりのために選んでくださった「目には見えない道」を、確信をもって歩むことができます。

私たちの信仰の焦点を主イエス・キリストに合わせるという霊的能力を育てることは、「義の道」を歩み続けるための鍵です([箴言 12 章 28 節](#); [15 章 19 節](#), [24 節](#), [16 章 9 節](#))。詩篇 16 篇 8 節でダビデは言います「わたしは常に主をわたしの前に置く。主がわたしの右にいますゆえ、わたしは動かされることはない」。主はダビデの前に現れたわけではありません。しかしダビデは、信仰において情熱の人でした。霊的に荒れる時期をも含む生涯の苦闘を通して、彼は主との関係に忍耐強く取り組み、その関係が成長し続けるために必要な時間と努力と謙遜を注ぎました。あまりに一貫していたので、彼には主のご臨在を思い描くこと——しかも「いつも」——は難しくありませんでした。そして人生のあらゆる困難のただ中で、主に頼り、言うなれば主にもたれかかることができたのです。ここで語られているのは抽象原理ではありません。ダビデは、実在の御方として主を語っています——「あらゆる時」に共にいてくださる、神の御子ご自身という、畏るべき力強いご臨在として！「主は私の羊飼いです」と彼は詩篇 23 篇 1 節で言います。おそらくこの「主人(あるじ)を思い描く力」、すなわち、救い主を心の目に呼び起こす力こそが、ダビデの霊的成功の大きな要因を成していたのでしょう。

ダビデと同じように、私たちもまた、神が私たちと共に、さらには私たちの内におられることを信じています([ヨハネ 17 章 23 節](#); [ローマ 8 章 10 節](#); [ガラテヤ 2 章 20 節](#); [エペソ 3 章 17 節](#); [コロサイ 1 章 27 節](#))。しかし、人生の雑踏の中でこの事実を思い起こし、それを実践し、悪魔の矢に対する盾として用い、信仰を支えとして活用できるようになるのは、自動的ではありません。使徒トマスは、復活の主と顔と顔を合わせるまで満足しませんでした。主が彼に言われたみことばを思い出すべきです——「見ないで信じる者は幸いである」([ヨハネ 20 章 29 節](#))。

神の真の力と栄光を見るには信仰が必要です。ヘブル人への手紙の著者は、モーセが「見えない方を見続ける者として忍耐した」([ヘブル 11 章 27 節](#))と記しています。主は彼の目には見えませんでした。モーセは決してひるみませんでした。信仰の目を通して主を見続けようとする彼の決意こそが、彼の霊的成長と、計り知れない霊的強さの基盤となったのです。同様に、ヘブル書の著者は続けて、私たちも「信仰の創始者であり完成者であるイエスに目を注ぎ続ける」ことを習慣とすべきだと述べています([ヘブル 12 章 2 節](#))。私たちが信じるすべてのものの先駆けであり完成者であるキリストは、暗闇の中の灯台のように私たちに輝き、いつの日かこの暗黒の世界の上に昇る明けの明星として、今この瞬間にも私たちの心を照らし、この人生の旅路を導く星となってくださいのです([第二ペテロ 1 章 19-20 節](#))

今は私たちの主であり救い主であるイエスを目にすることはできませんが、ペテロはこの節において、それでも私たちは主を愛しているのだと教えています。ペテロがこの愛を表現するのに用いた動詞は、新約聖書で通常「愛」を表すアガパオー(agapao, cf.

アガペー agape)です。この言葉については多くの注解がなされていますが、第一世紀のユダヤ人歴史家ヨセフスがこの動詞を「何かを繰り返し行う」あるいは「ある活動に専心する」という意味で用いていることを指摘しておくのは有益かもしれません(『ユダヤ古代誌』1 巻 64 節では、アダの子ヨベルが「牧畜生活に専心した」と記しています)。この類比は適切です。というのも、これは「力を尽くして主を愛せよ」(マルコ 12 章 30 節)という聖書の命令が意味するところを説明する助けとなるからです。私たちは主を実際に見たことはありませんが、それでも主に自らを専心すべきであり、すなわちイエス・キリストとの関係を大切にし、育み、日々積極的に築いていくべきなのです。地上における大切な人間関係のためにさえ、私たちはそれを当然のこととして行います。それならば、どれほど私たちは意識的に、自分の思いと力の一部をキリストに捧げ、キリストとその犠牲について思いを巡らし、また主に喜ばれるような献身的で粘り強い生き方を目指すべきでしょうか。

結論：私たちの人生は、すべてキリストを中心としています。もし一度でも、使徒パウロのような霊的な明晰さをもって物事を見ることができれば、私たちは確信をもってこう言えるようになるでしょう——「私にとっては、生きることはキリストであり、死ぬことは益である」([ピリピ 1 章 21 節](#))。このような態度を持つならば、信仰の保持、すなわち前節(9 節)で語られていた「救いという賞」そのものが、自然な結果としてついてくるのです。次回の学びでは、この主題——人生の試練のただ中で信者の信仰が堅く保たれること——に焦点を当てていきます。